

# 2022 JICA パキスタン事務所-JICA 中部-津島高校オンライン交流



令和4年7月8日(金)

「あれっ？ サッカーボールが Made in China になっている」球技大会のサッカーボールを見て衝撃が走った。11時半ぐらいのことだ。数十年前までは、パキスタン製だったはず。過酷な児童労働の問題が是正されたのか、はたまた単に縫製技術が落ちたのか・・・。

そんな球技大会の午後に見出しの交流が行われた。本校には、パキスタンにルーツをもつ生徒が在籍し母国に寄せる思いは強い。折しも、JICA 中部在職中に本校の新規バンコク研修等で大変お世話になった木下康光氏が、この4月の異動で JICA パキスタン事務所長にご栄進。そこで、オンライン交流の機会を設け、その生徒に自分の母国が話題になる場、自分の母国を自慢できる場をつくりたいと考え、木下所長に依頼したところ、快諾。さらに JICA 中部からも、今秋開催予定の「南西アジア展」に向けた事業の一環として協力を得られた。

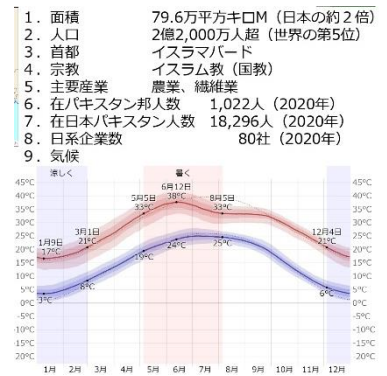
所長のパキスタン駐在は2回目。前は1999年10月の軍事クーデターの直後に赴任し、今回は建国史上初の首相不信任案による政権交代直後に着任。自分がイスラマバードに降り立つのは政治の変わり目ばかり、と不思議な縁を感じつつも、パキスタンではこれが日常なのだと。一方でパキスタンの現状を20年前と比較し、「発展の土台となる教育、保健・医療等の社会指標の向上」、そして「質の高い成長を見据えた産業の育成」がやはり不可欠であると強調された。特に教育の問題では、10歳以上の識字率が60%と低く（女子は51%）、不就学児童・生徒数が2283万人という。この部分が改善されなければ、やがて人口が3億を超える巨大な貧困国家ができ上がることになる。所長という立場で日本の知見と経験を生かして全力でこの問題に取り組んでいきたいという崇高な思いに感動しつつ、こちらも無言で力強く頷き返した。

また産業育成では、世界有数の綿花の栽培を生かし、アパレル産業の競争力アップを目指しているという。具体的には、デザイン・パターンメイキングのスキル向上や縫製工場の生産管理・品質管理である。これらの成果として、ファッションショーが定期的開催されるようになったと。

今回の講座では、パキスタンの基本情報から始まり、生徒から出された質問にも次々と回答。例えば料理では、宗教上ブタは食べないためニワトリがメイン。パキスタン料理がないわけではないが、店としてはインド料理として看板を出したほうが売れるらしい。また観光地としてパキスタン北部の Hunza（フンザ）があがった。「風の谷のナウシカ」の舞台とも言われているところでまさに現代の桃源郷。高い山々に囲まれ、雪解け水を利用した段々畑など景色が素晴らしいことに加えて、画像の女性が顔を隠さず、にこやかに活動していた。貧困問題やジェンダー格差問題をかかえる国の中で、一服の清涼剤となった。

パキスタンは地政学上重要な位置にある。インフラ整備など、周りからの「うまい話」に乗った結果、その経済が危機的状況になってしまっているという。「信頼で世界をつなぐ」をスローガンとする JICA にしてみれば由々しき事態である。旧政権での失敗と新政権での挑戦をバランスよくまとめながら絆を深めていくことが求められている。

木下所長は、9月に開催されるファッションショーで、パキスタンの職人が丹精込めて縫い上げた服装を身にまとい、最後に登場するという。その際には、復活した Made in Pakistan のサッカーボールを持って、パキスタンの縫製技術の衰退に対する不安を一蹴してもらいたい。



学校にいけない理由 (一例)	JICAの提案 (一例)
近くに学校がない	コミュニティの中にある施設や家を学校として使用する
きょうだいの世話や家の仕事が優先となる	通いやすい時間に教える
授業についていけなくてつまらない	短時間で学力が身に付く授業をする



世界有数の綿花の生産地